

5. 災害調査 (6) 富山県立山雪崩事故調査 (2010. 12. 1-12. 2)

研究代表者	雪氷：山口 悟	実施期間	平成 22 年度
研究参加者	北海道雪氷災害調査チーム 佐々木大輔 日本雪崩ネットワーク 出川あずさ、池田慎二、廣田雄介、横山巖、高月泰治		

[目 的]

2010年11月30日午前8時50分頃、山スキーで国見岳の北東斜面を登行中に雪崩が発生し、6名パーティの6人全員が雪崩に巻き込まれた。部分埋没の1人と、後方を歩いていた2パーティ等によって救助活動が行われたが、2名死亡、3名怪我となった。本調査の目的は、現場の積雪が時間とともに変質する前に雪崩調査を行い、雪崩発生要因等を明らかにし雪崩災害防止に資することである。

[実施内容]

雪崩発生の翌日12月1日に現地に入り、雪崩発生斜面において積雪および雪崩の調査を実施した。なお今回の調査は、防災科学技術研究所と北海道雪氷災害調査チーム並びに日本雪崩ネットワークの共同調査というかたちで実施された。

[成果と効果]

雪崩の種類は、“面発生乾雪表層雪崩”であった。雪崩の破断面は標高約2530m付近にあり、幅約70mにわたり破断しており、滑走規模は標高差にして約100mで傾斜は34度であった(図1)。破断面(図1のpit workと記されている場所)で行った断面観測(pit work)の結果、雪崩の原因となった層は、“表面から深さ約140cmのところ”に形成された”こしもざらめ層”であることがわかった(図2)。また雪崩発生箇所は風の影響により、場所により積雪の堆積状況が異なり、その結果同じ破断面上でもすべり面までの深さが10~150cmと大きく異なっていたことが明らかになった。



図1 雪崩発生個所の写真 (12/1撮影)

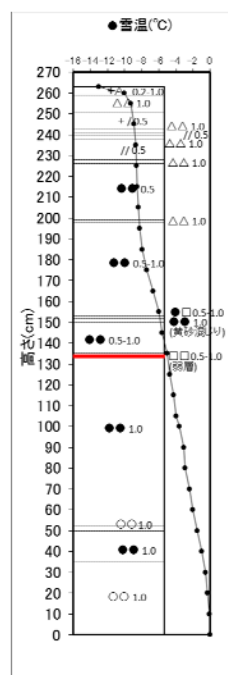


図2 図1のpit workの箇所で行った断面観測結果
赤線の部分が、今回弱層となったこしもざらめ層

[防災行政等への貢献]

上記調査結果と現在試験運用中の雪崩災害予測システムの予測結果とを比較検討することにより、同システムの高度化に貢献できる。